

文学部生のリアルな学生生活

Vol.42

文学部生のリアルな学生生活の様子を掲載し、ご父母の皆さまに文学部生の充実したキャンパスライフの風景、また文学部ならではの取り組み等の情報を発信いたします。

「縁」を大切に  
ひとつひとつの

文学部人文社会科学科社会学専攻2年  
神奈川県立神奈川総合高等学校出身

かがが  
莉りり  
花か



「社会学専攻？意外だね。」大学以前の友人は、私の進学先を伝えると決まって同じような反応をした。高校では国際コースに所属しており、国際交流や外国語の学習が大好きな私は、正直、自分でも国際系ではないこの進路を選んだことに驚いている。私が社会学に興味を持ったのは、大学受験を考え始めたころだった。自分が育つ



1年次調査実習の班員の集合写真



2年次調査実習のグループワークの様子

た地元が好きで、それに貢献する人になりたいと思うようになり、地域社会学という分野を知った。地域社会学をはじめとした社会学を学べる大学はたくさんあったが、自分の足で現地を訪問し、調査をすることに強い関心があった私は、社会調査を重点的に学べるこの中央大学への進学を決めた。コロナ禍という厳しい状況ではあったもの

の、憧れの社会学専攻で学べるのがうれしく、日々を過ごしている。そんな私が1年を過ごしてみて印象に残っていることは三つある。一つ目は、社会学専攻の授業だ。社会学専攻の授業は、クラ

ス単位で受けるものが多い。私のクラスでは、質問や発言が多く飛び交う。質問を投げかける人、それに答える人、さらにそれに指摘をする人、違う視点を提示する人。毎回その流れについていくのは大変だが、1回1回の授業が楽しい。

特に印象に残っているのは、社会学基礎演習という授業だ。この授業では関心の似た人でグループを作り、インタビュー調査などを通して興味のある社会問題について研究する。私は地域社会学に関心があるクラスメイトとグループを組み、1年間地域社会学に関する問題について研究をした。新型コロナウイルス感染症の影響もありオンライン形式での調査となったが、私にとっては初めての社会調査で、始める前からとても楽しみだった。

しかし、この研究は自分の想像以上に大変なものだった。研究テーマに関する先行研究をたくさん読んで分析し、リハーサルや先方との連絡など綿密な準備を重ね、

インタビュー本番に向けて準備。調査が終われば、それについて分析をし、話し合って結論を出す。終わりの見えない作業を体験し、社会調査の大変さを実感した。発表や調査が近づく毎に長時間作業が続き、それが深夜にまで及ぶこともしばしばあったが、それも含めて充実した時間だったと思う。また、新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていた時期には、インタビューの対象地まで実際に足を運び、フィールドワークも行うことができた。インタビュー対象者やそこに住む人と直接お話しし、自分の体験を通じた学修ができてとても満足だった。調査を終えてみると至らない点もたくさんあったと感じるが、それらをすべて反省点として今年度の調査に役立てている。1年間の研究はとても貴重な経験になったと思う。

二つ目は、昨年出場した英語プレゼンテーション大会だ。私は、昨年12月に京都外国語大学にて開催された「第15回森田杯」

Annual Morita Cup and The Mainic  
ntation Contest on Japanese C  
tment of British and American Studies, Kyoto University of Fore  
n with the Headquarters of Utilizing Regional Cultures, Agency for Cultural Affa  
by the Manshi Newspapers, Consortium of Universities in Kyoto, and Kyoto City  
Miyake Kyoto Hotel and The Institute for International Business, Communication



英語プレゼン大会で出場したパートナーと

英文毎日杯ペアで紹介する日本文化英語プレゼンコンテスト」の本選に出場した。出場を決めたきっかけは、コロナ禍でさまざまなイベントやサークル活動が自粛される中で何か打ち込めるものを見つけないかと思つたのと、自分の好きな外国語と関連させることができるものを探している中、この大会を見つけたからだ。プレゼンのテーマは「Turn trash into treasure」。京都府徳島県の上勝町で行われている「葉っぱビジネス」と日本のいりどり文化を掛け合わせたプレゼンテーションを発表した。発表で大切にしたことは、社会学専攻の学びを生かすことだ。

特に、インタビュ調査の知識を生かし、実際に葉っぱビジネスを行っている株式会社インタビュをさせていだき、自分たちにしかできない生の声を届けることを意識した。このような努力が実を結び、本選では2位という結果をいただいた。この経験は、どうすれば自分の意見を多くの人に届けられるのかを考えるよい機会になったと思う。

三つ目は、所属するアカペラサークル、Do it your voiceでの活動だ。新型コロナウイルス感染症の流行にともなう規制を受け、今年の春まではオンライン中心の活動だったが、規制が緩和された今年4月には初めての有観客ライブを行った。サークル員にとって、初めての対面有観客ライブだったことから、さまざまなトラブルを対処しながら手探りの活動となった。その中で、どうすれば自分の歌を聞いてくれる人に楽しい気持ちや伝えられるのか、歌の技術はもちろん、パフォーマンス面からも考えながら練習を進めたことで、最終的には納得のいく演奏ができたと思う。この経験を忘れず、これからも活動を続けていきたい。

一つ、私が大学生活で大切に行っていることがある。それは、高校時代の恩師が言っていた「どんな人との縁も大切に」という言葉だ。大学生活では授業でも課外活動でも、多くの人と関わる機会がある。その一つ一つの縁を大切に、大学生活を送ること。特に、調査などを通して人との関わりを大切にすることを学ぼうと、私の軸となっている考え方だ。これからも、さまざまな「縁」を大事に、学びを深めていきたいと思う。



アカペラの春ライブ本番の様子

## 文学部だより

# 長期休暇の活用について

文学部事務室 <sup>ささもと えいき</sup> 笹本 英希

1年生にとっては初めての夏休み、今年度で卒業される方にとっては最後の夏休みだったかと思いますが、ご子女はどうお過ごしだったでしょうか。

学生は大学の勉強や就職活動、サークルやアルバイト等毎日を忙しく過ごしておりますが、春夏の長期休暇を利用すればさまざまなことにチャレンジできる環境があります。海外の図書館に卒論作成のため文献講読をしに行った学生、映像制作技術を学び作品を見せてくれた学生、部活動で活躍し日本代表になった学生もおりました。これらの学生は長期休暇の前からしっかりとした準備期間があったのだと思います。

そして彼らのチャレンジや成功体験は一生の宝になると思います。ご父母の皆さまには是非長期休暇のご子女の「チャレンジ」をサポートしていただき、より良い大学生活

にしていただければと思っております。

欧米諸国では大学進学前や就職前の期間を利用し、さまざまなことにチャレンジする文化や制度を持つ国があります。社会に出る前に社会奉仕活動やワーキングホリデー等を通じて社会や人との関りを体験することで、人として大きな成長が期待できるようです。日本にはこのような制度はありませんが、大学の長期休暇を利用して同様の経験を積むことで大きく成長できるのではないかと考えています。

「介入し過ぎず、目をかける」。時には資金面でのサポートをしていただき、ご家族で長期休暇の計画を立ててみてはいかがでしょうか。今後の皆さまのご子女の成長やチャレンジを楽しみにしております。

